

奈良時代の石上氏

——奈良時代における議定官補任氏族の個別的研究(三)——

高 島 正 人

はじめに

石上氏は、姓は朝臣、蘇我氏とならぶ大化前代の雄族・物部氏の本宗家である。『日本書紀』天武天皇元年七月壬子条等にみえる物部連麻呂、持統天皇四年正月戊寅朔条の物部麻呂朝臣、天武天皇朱鳥元年九月乙丑条以下の諸条にみえる石上朝臣麻呂はいずれも同一人物と推定されるが、石上朝臣麻呂について『続日本紀』は「泊瀬朝倉朝廷大連物部目之後。^(孝徳天皇)難波朝衛部大華上宇麻乃之子也」と伝え、⁽¹⁾『公卿補任』も亦『雄略天皇大連物部目之後。難波朝衛部大華上物部宇磨之子』と註し、⁽²⁾『新撰姓氏錄』は石上朝臣氏を「神饒速日命之後也」と記して、⁽³⁾諸書いずれも物部大連家の後裔で一致している。

物部氏の本宗が石上氏を称したことについて、太田亮氏は「こは物部氏の氏神石上坐布留御魂神社の所在地^(天和国)山辺郡石上郷^(奈良県)てふ地名を負へるなり」と述べられているが、⁽⁴⁾けだし穩当な解釈であろう。あえて蛇足を加えれば、同地はまた物部⁽¹⁾石上氏の本貫であったことによるであろう。また物部連氏から石上朝臣氏への改姓の時期についてみると、『日本書紀』には天武天皇十三年十月の八色姓制定後の朝臣姓賜与五十二氏の名が記録されているが、その中には物

部連がみえて石上氏は見当らないのに、二年後の朱鳥元年天武天皇崩御に際して法官の事を誅したのは「直広参石上朝臣麻呂」と記されているから、朝臣姓賜与の時かそれからあまり年次を経ない時期に石上朝臣氏を称したものと思われる。⁽⁵⁾

石上麻呂は、右のように、当初物部連を称し、後石上朝臣氏を称したのみでなく、孝徳朝の衛部大華上物部連宇麻呂の子と伝えられているから、石上朝臣本宗家の初代と考えてよからう。壬申の乱に際しては、近江方に属して大友皇子の側近に侍したらしく、皇子が戦に敗れて山前に自縊した時、左右大臣および群臣は皆散亡して、皇子と行を共にしたのは彼と一、二の舎人だけであつたと伝えられている。⁽⁶⁾ 薨年から逆算すると、彼はこの時三十三歳であつた。⁽⁷⁾ 天武天皇五年十月には遣新羅大使に任ぜられ⁽⁸⁾ 翌六年二月に帰朝した。⁽⁹⁾ この遣新羅大使に任ぜられた時の冠位はまだ大乙上（令制従七位上相当）にすぎなかったが、五年後の天武天皇十年十二月には小錦下（従五位下相当）⁽¹⁰⁾ を授けられ、さらに五年後の朱鳥元年九月天武天皇の殯庭に法官の事を誅したときの冠位は直広参（小錦中、令制正五位下相当）⁽¹¹⁾ に昇叙されていた。

持統天皇三年九月には直広肆石川朝臣虫名等と大宰帥河内王に位記を送る使となつて九州に赴き、筑紫の新城も監した。⁽¹²⁾ 翌四年正月元旦の朝賀には大盾を樹てたことがみえる。⁽¹³⁾ 持統天皇は翌々六年三月広瀬王らを留守官として伊勢に行幸せられたが、⁽¹⁴⁾ 麻呂はこの行幸に従つたらしく、『万葉集』に「石上大臣駕に従いて作れる歌」一首を残している。⁽¹⁵⁾ 持統天皇十年十月直広耆（大錦下、令制正四位下相当）に昇叙され資人五十人を仮賜されたが、⁽¹⁶⁾ このとき右大臣多治比真人嶋が正広参、大納言阿倍朝臣御行と同大伴宿祢御行が正広肆であり、この三者との差は歴然としていたが、おなじく直広耆多臣品治らと共に、わが国政界において五指に入る高位に列したのである。またこのとき彼とおなじく資人五十人を仮賜された一人は藤原朝臣不比等であつたが、不比等は直広式で彼より二階下であつた。⁽¹⁷⁾

かくて麻呂は、奈良時代初頭右大臣に列するのであるが、以後の経歴は次節にゆずるとして、前述のように壬申の乱に際して近江方につき天武の敵であったにもかかわらず、彼が天武・持統両朝に重んじられて立身出世を遂げ高位高官に昇り得たのはなぜであろうか。一つには、勿論大化前代より継承した物部氏の勢威と職掌があり、たとえば即位式・大嘗会等に際して大盾(神楯)を立てる重要な職掌に勤仕するのは物部氏であったこと⁽¹⁸⁾。二つには壬申の乱に際し大友皇子の側近に侍したといっても年齢三十三歳舎人クラスでその地位きわめて低く、政務を決する左右大臣の蘇我赤兄・中臣金、御史大夫の蘇我果安・巨勢比登・紀大人らとは比肩すべくもなく、ある意味では責任のない地位であつたことが挙げられよう。しかし三つにはおなじ物部氏一族の朴井連雄君の存在があげられる。

雄君は小君とも記され⁽¹⁹⁾、氏姓は榎井連とも物部連とも記されているが、彼は天武天皇の舎人で、乱の原因となつた変事をいち早く天皇につげ壬申の乱の勝利、ひいては天武天皇即位の楔機をつくつた人物であつた⁽²²⁾。彼は天武天皇五年六月病を発して卒したが、天武がこの功を多とし殊功として心に止めていたことは、その卒去に際して内大紫位を贈り氏上を賜うたこと⁽²⁴⁾によつても推察できよう。彼はさらに封戸一百戸を賜つたが、大宝元年七月中功に位置づけられ、その四分の一を子に伝えることが許された⁽²⁵⁾。彼が内大紫位をうけた一半の理由が、その軍功のほかに大化前代の中央豪族物部氏の一族であつたからであることはすでに述べたところであるが、麻呂の昇叙はこの雄君の存在とその卒去に深いかわりのあることを痛感する。雄君がもしこの後長寿を全うしたとすれば、その出自と殊功とから生前において立身を遂げ高位に昇り高官に任じたであろうことは容易に想像されるところである。しかし天武五年という年次において卒したことは、物部氏一族の次代を背負う人物として石上麻呂が登用される機縁となつたように思う⁽²⁷⁾。前述したように、雄君が卒した天武天皇五年には僅か大乙上にすぎなかった石上連麻呂が、五年後の天武天皇十年には七階昇叙の大躍進を遂げ小錦下に叙されたことは、彼が雄君なきあとの物部氏の頭梁として位置づけられ、史籍

第1表

旧姓 八色姓		君	臣	連	直	計
朝	臣	11	39	2	0	52氏
宿	祢	0	1	49	0	50 "
忌	寸	0	0	10	1	11 "

に明文を欠ぐものの恐らく物部氏一族の氏上の座を与えられ以後位階・官職とも顕要の位置を占めることになったものと思われる。

なお物部氏自身について大化前後の勢力を考えれば、一般には六世紀末蘇我・物部両氏の争いの結果、蘇我馬子のため物部守屋が敗れて同氏は亡んだと説明されることが多いが、なお相当の勢力を残して大化後に及んだことは疑いが無い。大化改新時には、大化元年八月朴井連(欠名)が東国々司(介)に任ぜられ、⁽²⁸⁾同元年九月の古人大兄皇子の謀反事件に際して物部朴井連稚子は古人大兄皇子側に与したことが知られる。⁽²⁹⁾物部朴井連鮪は齊明天皇四年十一月有間皇子謀反に際してその宅を囲み、⁽³⁰⁾同天皇七年八月には物部連熊が後將軍阿倍比羅夫らと百済救援に赴いている。⁽³¹⁾なお史料性に多少の問題はあるとしても『天孫本

紀』には榎井臣等之祖と記された孝徳朝大華上物部荒猪連などがみえる。また朴井連子麻呂は『日本書紀』天武天皇九年七月庚寅条によれば、このとき小錦下を賜っている。壬申の乱に際しても大友皇子側には麻呂が最後まで側近に侍し、大海人皇子側には朴井連雄君が舍人として側近に侍したことも既述の通りであるが、特に天皇即位の式に大盾を樹て大嘗会に神盾を立てる物部氏の伝統的職掌と壬申の乱における雄君の活躍とは、天武朝における物部氏への評価を絶対的なものにしたといつてよい。

たとえば『日本書紀』には、天武天皇十三年の八色姓制定後の朝臣姓以下の賜姓氏族名が記されているが、朝臣・宿祢・忌寸三姓の賜姓氏数を旧姓別に表示すると第一表の通りである。君姓と臣姓の有力氏には朝臣姓が、連姓の有力氏には宿祢および忌寸の姓が賜与されるのが一般的であり、中臣・物部の両連氏が朝臣姓を賜与されたのは、きわめて異例の処置であることがわかる。中臣氏が他の連姓諸氏を超えて朝臣姓を賜与されたのは、宮中の祭祀を司る朝

廷内部の肝要氏族であった伝統に加えて、鎌足の大化改新における功業と爾後における天皇輔弼の功績にもとずくといえよう。大化前代かつては蘇我・物部両氏に超える雄族で、武門の誉高く、大化改新に際して孝徳天皇の即位式に壇の右に金靱を立てのち右大臣に任じた大伴長徳、その弟馬来田・吹負、子安麻呂らの壬申の乱における大活躍で知られる大伴氏ですら宿祢姓に止まった八色の賜姓に、物部氏が中臣氏とともに朝臣姓を賜与されたことは、雄君の功業に対する天武天皇の評価が今日の我々の認識をはるかに超えるものがあり、物部氏に対する評価の高さを示すといふことができる。

一 奈良時代前期の石上氏

奈良朝前期、文武・元明・元正の三朝に氏名の明らかな石上氏一族中の授爵者としては、前記の麻呂のほか豊庭・勝男の両者が知られる。また麻呂の子の乙麻呂・東人および諸男らが正従六位クラスに達していたことが推定される。

麻呂は、文武天皇四年十月筑紫惣領に任ぜられたが、このときまた一階をすすめられて直大老に叙せられていた。⁽³²⁾翌大宝元年三月、左大臣多治比真人嶋政権の中納言に任ぜられ、同月廿一日嶋以下の首脳部を含む百余の官人に新しい大宝令制による新位階が叙賜されたとき、彼は二階（旧制三階）の昇叙に預って正三位に進み、即日大納言に任ぜられた。⁽³³⁾時に六十二歳であった。このときの昇叙と政権構成の特色についてはすでに述べた通りである。⁽³⁴⁾それから僅か四カ月、左大臣嶋は同年七月に薨じたが、このとき彼は三品刑部親王とともに吊賻使となってその第に赴いてい⁽³⁵⁾る。ともあれ、嶋の薨によって六十二歳の彼は六十七歳の右大臣阿部朝臣御主人に次いで政界第二位の位置を占めたのである。

大宝二年八月大宰帥を兼ね⁽³⁶⁾翌三年閏四月右大臣阿部朝臣御主人が薨じると、その吊賻使を勤めた⁽³⁷⁾が、御主人の薨によって遂に彼はわが国政界の最上位者となり、慶雲元年正月從二位に進み右大臣に任ぜられ⁽³⁸⁾、封戸二千石百七十戸を賜⁽³⁹⁾った。

以前述べたことがあるように⁽⁴⁰⁾、すでに大宝元年七月、左大臣多治比真人嶋薨去のあとを受けた阿部朝臣御主人政権は大納言を含めて僅か四名の少数執行部となったため、参議を置いて国政審議の円滑化を計ったが、阿倍朝臣御主人を失った石上朝臣麻呂の政権は大臣・納言合せて僅か三名となり、大納言補任の適格者⁽⁴¹⁾（有資格者）を欠いでその補充も困難であったため、慶雲二年四月令外官として中納言制を復活⁽⁴²⁾し、右大臣麻呂を首班に大納言二、中納言三、参議三、計九名のかかなり整備された議定官構成を達成した⁽⁴²⁾。この麻呂政権の政治的業績については改めて別に論じたいが、慶雲四年六月文武天皇が崩じ七月には元明天皇が即位された。翌和銅元年正月、大納言藤原不比等とともに正二位に叙せられ⁽⁴³⁾、同年三月かなり大幅な大政官の人事移動が行われて左大臣に任ぜられ⁽⁴⁴⁾。同年七月知太政官事穗積親王、左大臣石上麻呂以下に職務精励による恩勅が下された⁽⁴⁵⁾が、これは恐らく平城京遷都の大事業に関連して人心収攢、一致団結の必要が感ぜられたものであろう。

和銅三年三月平城京に遷都し、左大臣の彼が旧京の留守司を命ぜられ⁽⁴⁶⁾た。その後七年を経て養老元年三月に左大臣正二位七十八歳をもって薨⁽⁴⁷⁾じた。省みれば、阿倍朝臣御主人の薨後、大納言・右左大臣として、実に十四年の長期間政権の首座にあり、文武・元明・元正の三朝に仕えて数々の治績を挙げたのである。彼が薨ずると天皇は深く惜しんで廃朝し、長屋王らを第に遣して弔賻させ、從一位を賜⁽⁴⁸⁾ったが、百姓もみな追慕して痛惜しない者はなかったと伝え⁽⁴⁸⁾ている。かくて同年十一月、繩百疋・糸四百紵・白綿一千斤・布二百端を彼の第に贈⁽⁴⁹⁾られた。

豊庭は、慶雲元年正月麻呂が從二位右大臣に進んだとき、從六位上から從五位下に叙せられ⁽⁵⁰⁾た。その後間もなく一

階を進められたらしく、同四年十月文武天皇の御大葬に際して下毛野朝臣古麻呂・藤原朝臣房前らと共に造山陵司となったが、このとき彼の位階は従五位上であった。⁽⁵¹⁾和銅四年四月成選叙位にあたり従五位上から一挙三階を進めて従四位下に叙された。⁽⁵²⁾授爵ののち僅か七年にして四階を進められ従四位に達したのは、有力氏族中にあっても異例の昇叙であり、当時政界第一位にあった麻呂の存在によるところが大であったと思われる。またその昇叙のあり方、麻呂の年齢からすれば、豊庭は物部氏一族における麻呂の後継者と目されていたのかも知れない。いずれにせよ、授爵後の彼は、石上・榎井両氏を含む物部氏一族の中で麻呂に次ぐ第二位の地位を占めたのである。

和銅四年九月新都造営の役民の逃亡者多く防守が備わらないため軍営をたて兵庫を禁守したが、このとき彼は紀朝臣男人・栗田朝臣必登らとともに將軍となった。⁽⁵³⁾また同七年十一月には迎新羅使右將軍に任ぜられている。⁽⁵⁴⁾靈龜元年正月従四位上に昇叙され、⁽⁵⁵⁾同年七月には知大政官事一品穗積親王薨去にあたって喪事の監護にあたった。⁽⁵⁶⁾養老元年三月麻呂薨去の後、彼が物部氏中の最高位者、しかも唯一の高位所有者となった。彼のもつ位階従四位上は、令制としては権責の中で中納言補任資格にもあたらないが、当時のわが国政界における有位者中では十指に入る高位の所有者であり、もちろん国政の分野においても物部氏を代表すべき位置にあったが、彼が翌養老二年三月十日の右大臣藤原不比等を首班とする議政官補任人事の選に預からなかったことは注意を要しよう。⁽⁵⁷⁾すでに詳しく述べたように、この補任人事には幾多の留意すべき事項が含まれていたが、新たに中納言に登用された多治比真人池守がその父、前左大臣嶋の後継者、おなじく新中納言となった巨勢朝臣邑治は、その前年に卒した中納言巨勢朝臣麻呂の後任、おなじく新中納言大伴宿祢旅人は前大納言であった大伴宿祢安麻呂の後継者としての登用人事だったと考えられ、かつ巨勢邑治と大伴旅人の位階は、彼石上朝臣豊庭とおなじく従四位上にすぎなかったことを考えると豊庭が同等の位階をもちながら、中納言はおろか参議にも登用せられなかったことは留意してよからう。あるいは既に病床にあったのであ

ろうか、かくて彼は特記せられる程の官職につくこともなく同年五月從四位上を以て卒した⁽⁵⁹⁾。彼の卒去によって、石上氏一族の授爵者は皆無となり、以後当分の間石上氏ないし物部一族は議定官に列する道を失ったのである。

勝男は、勝雄⁽⁶⁰⁾また堅魚にもつくられているが、麻呂・豊庭の連年の薨卒によって一族の授爵者皆無となった七カ月の後、養老三年正月從六位下より從五位下に叙せられ⁽⁶¹⁾、物部一族中唯一の授爵者として登場した。養老五年九月伊勢奉幣使派遣の儀式に前内舍人八人を領して供奉し⁽⁶²⁾、神龜元年十一月の大嘗会には後述の石上朝臣乙麻呂・同諸男らと内物部を率いて神楯を齋宮の南北二門に立て⁽⁶³⁾、同三年正月從五位上に昇叙せられた⁽⁶⁴⁾。授爵後七年、笠朝臣御室と同時に授爵し、このとき同時に一階を進められている。彼と授爵同期者のうち佐伯宿祢馬養と大野東人はすでに神龜元年從五位上にすすみ、特に東人は征夷の功によって前年從四位下に叙され、この時從四位上に進んだが、一般的に言えばまず順調な昇叙であった。神龜五年式部大輔に任じていたが、大宰帥大伴旅人の妻大伴郎女の病死に際して、勅使として九州大宰府に下向し喪を弔い賜物を届けた。事終つて駅使・大宰府の諸卿大夫らと基肆城に登り、四方を望遊したが、この時歌を作り、旅人もこれに和している。『万葉集』に、「式部大輔石上堅魚朝臣の歌一首」として、註記ならびに和えた旅人の歌とともに収められている⁽⁶⁵⁾。天平三年正月正五位下に進み⁽⁶⁶⁾、同八年正月正五位上に昇叙された⁽⁶⁷⁾。乙麻呂の昇叙の在り方からすれば、彼は正五位上昇叙ののち、間もなくこの世を去ったように思われる。彼に関する以後の消息は知られない。

東人は、後に述べる家成の父で、左大臣麻呂の子である。また位階は正六位上であつたと伝えるから⁽⁶⁸⁾、奈良時代前期に下級官人として勤仕したが、比較的若く、授爵に至らずして死去したのである。

以上、奈良時代前期の石上氏は、麻呂が大納言から左右大臣として議定官に列し、あるいは首班として政界に君臨したが、授爵者の絶対数が少なく、麻呂の他には豊庭一名にすぎなかったため、麻呂・豊庭が相次いで薨卒すると、

授爵者そのものが皆無となり議定官に列することもなかったのである。

二 奈良時代中期の石上氏

奈良時代中期、ここでは聖武・孝謙二代の間に、新たに授爵を受けたことの明らかな石上氏一族としては乙麻呂・国守・宅嗣の三名があり、他に諸男の存在を知り得る。

乙麻呂は、左大臣麻呂の第三子と伝え、弟麻呂にもつくられている。⁽⁷¹⁾神亀元年二月、正六位上より従五位下に叙された。⁽⁷²⁾同年十一月大嘗会に際して、石上朝臣勝男らと内物部を卒いて神楯を齋宮の南北二門に立てた。⁽⁷³⁾天平四年正月従五位上に昇叙され、⁽⁷⁴⁾同年九月丹波守に任ぜられたが、授爵から従五位上への一階昇叙に勝男より一年長い八年を要している。これは勝男とかなり年齢差ないし世代差があり、あるいは勝男と同位にならぶことへの配慮がはたらいたのであろうか。ともあれ、この神亀・天平の初年はこの正従五位の権貴の下に止まった勝男と乙麻呂が、石上氏中の高位者であり、氏中の第一位と第二位を占めていたのである。

天平八年正月、勝男がまた一階を進められて正五位上に進んだ時、彼も一階下の正五位下に昇叙された。⁽⁷⁶⁾既述のように卒去したのであろうか、このうち勝男は史料上から姿を没し、代って乙麻呂の昇進は加速度を加えた。翌九年九月一階を加えて正五位上となり、⁽⁷⁷⁾三カ月余を経た天平十年正月には従四位下に昇叙されて、⁽⁷⁸⁾左大弁に任じた。⁽⁷⁹⁾この天平九年は筑紫に発した疫病が猛威をふるい、行政の中枢にあった藤原四子の命を次々に奪った有名な年である。すでに詳しく述べたことがあるように、⁽⁸⁰⁾この年六月には中納言多治比真人県守も薨じたから大臣以下大・中納言全員を失い、参議も鈴鹿・葛城二王と大伴宿祢道足を残すのみになったのである。天平九年九月従四位下に昇叙された藤原豊成・巨勢奈氏麻呂、正五位上に昇叙された大伴牛養・高橋安麻呂・彼石上乙麻呂らは、いずれも近い将来の議定官補

任候補者といって良い。彼の従四位下への急速な昇叙は、かような歴史的・政治的事情のもとにあったと考えられる。物部氏の本宗、ことには贈従一位左大臣麻呂の嫡子という彼の出自と後述する人物・才能は、議定補任の有力候補たり得たであろうし、かつまた彼の叙せられた従四位下は、事と次第によっては直ちに参議に任ずることも可能な位階であった⁽⁸¹⁾。彼が任ぜられた左大弁は、このとき右大臣に任じた橘諸兄(葛城王)が天平元年以来九年間、ことには天平三年以降参議に補任されながらその地位に任じた事務の最高官である。おそらく乙麻呂の出自と人物とが諸兄の信頼をかちとり、左大弁に任ぜられることになったものと思われる。かくて彼は、勝男に代って名実ともに石上朝臣氏中の第一人者となり、議政官をうかがう地位に進出したのである。

好事魔多しの諺がある。彼は翌天平十一年三月久米連若売を姦したという罪により土左国に配流され、若売もまた下総国に流された⁽⁸²⁾。明確な徴証はないものの冤罪の疑いが濃い。彼の配流から三週間余、天平十一年四月橘諸兄政権の新参議として新たに登用された五名は、早くから従四位上であった大野朝臣東人を除けば、藤原朝臣豊成以下いずれも天平九年九月の昇叙者たちであり、ことに県犬養宿祢石次は天平九年九月には乙麻呂らより一階下の正五位下に叙せられ、この十一年正月には二階級特進して従四位下に叙されたばかりであった。この時期における議定官の補任人事、四子薨去後の藤原一門の弱体、彼の人物と才幹、彼に姦せられたという久米連若売の下総国配流、後述するように僅か三、四年の短期間での捨免と政界復帰、その後の昇叙と中納言補任などを念頭におけば、このとき政権から彼を遠ざけるための政治的謀略の匂いが強く感ぜられる。

翌天平十二年六月の大赦では見送られたもの⁽⁸³⁾、その二、三年後には配流の罪を許されて京に帰ったらしく、天平十五年五月には従四位上に昇叙せられ⁽⁸⁴⁾、翌十六年九月には西海道巡察使に任ぜられている⁽⁸⁵⁾。天平十八年三月には治部卿従四位上とみえ、河内国古市郡内で白亀を獲たこと、大端と考えられる旨を奏上している⁽⁸⁶⁾。同年翌四月には常陸守に任

じ⁽⁸⁷⁾、正四位下に昇叙せられ、同年九月には右大弁に任じた⁽⁸⁸⁾。天平二十年二月從三位に進み⁽⁹⁰⁾、同年四月元正天皇御大葬の装束司となった⁽⁹¹⁾。翌二十一年四月從三位中務卿とみえ、宣命を宣した⁽⁹²⁾。同年七月中納言に任じ⁽⁹³⁾、翌天平勝宝二年九月薨じた。時に中納言從三位兼中務卿とみえる⁽⁹⁴⁾。なお『公卿補任』は彼が從三位に昇叙された翌月の天平二十年三月二十二日参議に任じたことを伝え、また参議に任ずることなく中納言に任じたとする或本もある旨を記している⁽⁹⁵⁾。彼の参議補任は『続日本紀』など正史にはみえない。

『万葉集』には「石上乙麻呂朝臣の歌一首」が残されており、作者不明の「石上乙麻呂卿の土左国に配せられし時の歌三首并に短歌」が収められている⁽⁹⁷⁾。また「石上大夫の歌一首」があり、その左註に「右、今案ずるに、石上朝臣乙麻呂越前の国守に任けられき、蓋この大夫か」と記している⁽⁹⁸⁾。正史には彼が越前守に任じたことはみえないが、事実とすれば流罪の前後(天平年中前半か中頃)のことであろう。しかし石上大夫が乙麻呂であるか否かは速断できにくい。既述の從四位上石上豊庭か正五位上石上勝男の可能性も絶無ではない。しかしその歌調や内容および現在知られる三者の史料からすれば、かつて荒木田久老が、天平十六年乙麻呂が西海道巡察使として九州に降った時の歌であろうとした判断は、今日のところもとも妥当と思われる。

『懷風藻』には彼の伝および五言四首が載せられている⁽⁹⁹⁾。伝は、彼の人柄について「地望清華、人材穎秀、雍容閑雅、甚善風儀、雖勗志典墳、亦頗愛篇翰」と記し、また「天平年中詔して入唐使を簡ぶ。元来此の拳は其人を得難し。時、朝堂に選ぶに公の右に出ずるもの無し。遂に大使を拜す。衆僉悦服す。時の推す所となること皆此のごとき類也」と記されている。清廉で、人品骨柄文才にすぐれ、人々の人望も彼に集ったことが知られる。また中納言に任じた後の彼について「風采日新、芳猷雖遠、遺烈蕩然」と記している。彼は実際には遣唐使として入唐はしなかったけれども、以て彼の人物・性格、人望の程を知り得よう。なお乙麻呂の伝は、土左国配流の時の彼について「嘗有朝

謹、飄寓南荒。臨淵吟沢、写心文藻、遂有銜悲藻兩卷、今伝於世」と記しているが、「五言、飄寓南荒贈在京故友一首」以下『懷風藻』に収められた五言四首も、恨を呑み、独り傷悲に沈んだ彼の心境をよく伝え、かつまた彼の文才の非凡であつたことを示している。

諸男は、神亀元年十一月大嘗会に際し、既述の勝男・乙麻呂らと共に内物部をひきいて神楯を齋宮の南北二門に立てたことが知られるが、⁽¹⁰⁰⁾これが彼に関する唯一の知見である。このとき従六位上であつたが、その後の授爵は知られない。その人名位階からすれば勝男の弟であつたかと想像される。

国守は天平勝宝元年四月無位より従五位下に叙せられ、⁽¹⁰¹⁾天平宝字四年五月従五位上に昇叙されたが、彼女に関する知見もこの二カ条のみである。おそらく后宫に勤仕した女官で、その精勤を愛でられたものであろう。

さて、天平八年かその後間もなくと想像される勝男の卒後、石上朝臣氏の授爵者は長らく乙麻呂唯一人であつたが、国守の授爵によつて授爵者は男性一、女性二、計二名となつたのである。けだし乙麻呂の薨去は授爵したばかりの女官の国守を以て族中の最高位者たらしめたのであり、石上朝臣氏の男性授爵者はふたたび皆無となつたのである。かくて、乙麻呂が薨じて五カ月足らずの後、天平勝宝三年正月、その子宅嗣が若冠二十三歳で正六位上より従五位下に叙され⁽¹⁰³⁾授爵者一名を獲得したが、乙麻呂薨後の孝謙朝においては、これによつて二十歳台の宅嗣が僅か従五位下の低位を以て石上一族の最上位を占めたのである。史上知られる宅嗣の活躍は、淳仁天皇以後のことで、ここである奈良朝後期に属するので、宅嗣については次節で述べよう。

以上、奈良朝中期の石上氏は、授爵者は常時僅か一、二名にすぎず、おおくは五位に止まり四位以上に達した者は贈従一位左大臣麻呂の子たる乙麻呂一人にすぎなかった。また乙麻呂は遂に中納言に任ぜられ議定官の一角を占めたものの、その期間は僅か一年二カ月に過ぎなかった。かくて石上氏は、麻呂の薨後三十二年余にわたり議定を送れな

ったのみならず、乙麻呂の薨後も十五年余、前後あわせて約五十年議定に列し得なかったのである。

三 奈良時代後期の石上氏

淳仁天皇以降のここである奈良時代後期に、新たに授爵者として登場する石上氏一族には、奥継・家成・真足・継足・糸手・等能古の六名が知られるが、うち糸手・等能古の両者は女性である。他に志悲豆の名が知られる。

糸手は、天平宝字七年正月無位より従五位下を授けられた⁽¹⁰⁴⁾。これが彼女に関する唯一の知見である。等能古は、景雲元年十月おなじく無位より従五位下を授けられた⁽¹⁰⁵⁾。これがまた彼女に関する唯一の知見である。しかし両者とも先に述べた国守とおなじく女官とおぼしき女性らと共に、等しく無位から授爵したことからすれば、いずれも女官として勤仕した功を愛でられたものと推察される。唯国守がさらに従五位上にすすんだのに対し、両者とも授爵ののち昇叙した記録がない。おそらく従五位下を以て致仕したものであろう。志悲豆は、天平神護二年四月、一男子があつて聖武天皇の皇子で石上朝臣志悲豆の子と詐称した事件があり⁽¹⁰⁶⁾、そのことによってその名と存在が知られるのみである。

宅嗣は、中納言乙麻呂の子で、すでにふれたように天平勝宝三年正月授爵し、同五年五月には治部少輔であつたらしく、『万葉集』に「五年正月四日、治部少輔石上朝臣宅嗣の家にて宴せる歌三首」とみえ⁽¹⁰⁸⁾、宅嗣の歌一首が収められている。他は中務大輔茨田王と大膳大夫道祖王の歌である。天平宝字元年五月従五位上に叙せられ⁽¹⁰⁹⁾、翌六月相模守に任ぜられた⁽¹¹⁰⁾。授爵後一階を加えるまでに六年余で、ほぼ順調に昇叙されている。その後七年余昇叙のことなく、天平宝字八年九月惠美押勝伏誅の翌十月二階を昇せて正五位上に叙されて常陸守に任じられ⁽¹¹²⁾、以後後述のように急速な累進を加えている。

その間、天平宝字三年五月には三河守⁽¹¹³⁾、同五年正月には上総守に任ぜられ⁽¹¹⁴⁾、同年十月には遣唐副使を命ぜられた⁽¹¹⁵⁾。翌六年三月遣唐副使は任を解かれ、代りに藤原朝臣田麻呂が任じられたが、宅嗣は、翌々七年正月には文武大輔に任じられ、さらに「侍従は故の如し」とみえるから⁽¹¹⁷⁾、彼はこの時より以前に侍従として天皇の側近にあったことが知られる。一年後の天平宝字八年正月には大宰少式に任ぜられた⁽¹¹⁸⁾。この年九月いわゆる恵美押勝の謀反事件が起って押勝が誅された。彼はその翌十月既述のように二階昇叙して常陸守に任じたが、さらに二カ月後の天平神護元年正月には従四位下に昇叙され⁽¹¹⁹⁾、同年二月中衛中将に任じて常陸守を兼ね⁽¹²⁰⁾、翌二年正月八日かそれ以前にまた一階を進めて従四位上右大弁に任じ、この日さらに参議に任じた⁽¹²¹⁾。

時に年僅か三十七歳、このとき大納言から右大臣に任じた藤原永手は五十三歳、中納言から大納言に任じた藤原真楯は五十二歳、おなじく白壁王五十八歳、参議から中納言に任じた吉備真備は七十二歳、参議は中臣清麻呂六十五歳、山村王四十五歳、同年七月参議に新任された文室真人大市は六十三歳、藤原田麻呂は四十五歳、同継繩は三十九歳であり、ただ一人参議藤原繩麻呂が天平元年の出生で彼と同年か一歳若い三十六歳であった。彼は単に他氏に抜んでいただけでなく、繩麻呂を除く藤原氏一族よりもはるかにめざましい昇進を遂げたのである。同年十月正四位下に進み⁽¹²²⁾、一年二カ月後の神護景雲二年正月また二階を進めて繩麻呂とともに従三位に叙された⁽¹²³⁾。また式部卿に任じられしく同年十月新羅交易物を買うため大宰綿一千屯を賜ったが、このとき式部卿従三位と記されている⁽¹²⁴⁾。また『仏事捧物歴名』にも式部卿従三位とみえる⁽¹²⁵⁾。この頃までの彼の異常な累進は、押勝誅滅の与同者としての功績もさることながら、左大臣麻呂の孫・中納言乙麻呂の子という出自に加えて、後述する彼の文才人物識見を見込んで、道鏡ら非藤原氏一派が藤原氏に対抗できる優れた人材として彼に期待し、彼を囑望したためではなかったろうか。翌宝龜元年八月の称徳天皇の崩御とそれに伴う道鏡の失脚とは彼の昇叙に停止令を発したようである。以後、彼の薨去直前まで

十三年余の長年月にわたり、遂に一階の昇叙もみなかった。彼が一階をすすめられてようやく正三位に叙せられたのは、桓武天皇即位後の天応元年四月のこと⁽¹²⁶⁾で、彼も策定の一員であった光仁天皇在位中には遂に昇叙の恩典には浴しなかった。

それはとも角、宝亀元年八月称徳天皇の崩御が迫まると、彼も議定の一員として左大臣藤原朝臣永手らと禁中の策を定め、大納言白壁王を立てて皇太子となした。これが光仁天皇であるが、彼はこのとき参議式部卿従三位であった⁽¹²⁷⁾。翌月大宰帥を兼ねたが、翌二年三月式部卿となり、十一月には後述する息継・家成らと大嘗会に神楯杵を立て、翌々日中納言に任ぜられた⁽¹²⁸⁾。宝亀四年十月、二品難波内親王の薨に際してその吊使を勤めた⁽¹²⁹⁾。宝亀六年十二月願いによって姓物部朝臣を賜わり、以後約四年物部朝臣を称した。同八年九月には内大臣藤原良継の薨に際して吊使となり、十月には中務卿を兼ねた⁽¹³⁰⁾。またこの頃皇太子傳も兼ねたらしい。宝亀十年五月、唐使を朝堂に饗したとき、宣勅使となり、同年十一月には物部朝臣を改めて石上大朝臣の姓を賜った⁽¹³¹⁾。翌十一年二月大納言に任じ、前述した正三位への昇叙より二カ月後の天応元年六月、大納言正三位兼式部卿を以て薨じた。時に五十三歳、正一位が贈られた⁽¹³²⁾。『続日本紀』の彼の薨伝には彼の人物学問について、「性朗悟にして姿儀有り、経史を愛尚して涉覧する所多し。好んで文をつらね、草隸を工にす⁽¹³³⁾。」と述べ、また「辞容閑雅にして時に名あり、風景山水に値うごとに筆をとってこれに題す。宝字より後宅嗣及び淡海真人三船を文人の首とす。著わす所の詩賦数十首、世多く之を伝誦す。」と記している。以て、彼が明朗な性格の持主で、鍛え抜かれ磨きぬかれたすぐれた識見を持ち、物静かで上品な言葉使い、気品にあふれた挙措態度の人物であったこと、深い学識を持ち、文筆にすぐれ、淡海三船とならんで奈良時代後期の二大文人と呼ばれたこと、数十首の詩を賦し、人々に伝誦されたことを知り得る。また続けて、彼は旧宅を仏門に喜捨して阿闍寺となし、寺の一隅に中国の経籍をあつめた書院を設けて芸亭と呼び、好学の徒に開放して自由に勉学を許

し、勉学のための条式を定めたことを伝えているが、その条式の略には「内外(の)兩門(は)本^{もと}一体たり。漸^{ようや}く極れば異なるに似たれども善く誘^{ことな}げば殊^{ことな}ならず。僕、家を捨て寺と為して心を帰すること久し。内典を助けんが為めに外書を加え置く。地はこれ伽藍、事すべからく禁戒すべし。庶^{こいねがわ}くば、同志を以て入る者は空有に滞ることなく、兼ねて物我を忘れ、異代来らん者は塵勞を超出して覺地に帰せんことを」と記されていたという。この条式の略によっても、彼の巧みな文筆の一端を知ることができるが、彼の学問が内外兩典にわたり、かつまた内外兩典の教えは究極的には同一であると見通していたこと、しかも深い仏教信仰に支えられ、中国の書籍を集めた芸亭を設けたのは彼が仏教經典(内典)をよく理解するためには中国の経籍の研究も必要であると考えていたこと、芸亭に入って外典の研究にはげむ者も最終的には仏門に帰依することを期待していたこと、などを知り得よう。『続日本紀』はさらに続けて「其の院今見るに存せり」と述べて平安時代『続日本紀』が編纂されたころにもなお芸亭が存続したことを伝え、かつまた「臨終に遺教して薄葬せしむ」と記して、宅嗣が薨去に臨んで薄葬するよう遺言したことを伝えている。

『公卿補任』の伝える彼の経歴もほぼ上述に尽きているが、宝字元年紫微小弼に任じ、宝龜二年三月大宰帥より式部卿に遷任した旨を伝えている。⁽¹⁴²⁾『日本後紀』には、賀陽朝臣豊年を芸亭に招いて、数年間にわたり広く群書を究めさせたことがみえ、⁽¹⁴²⁾『経国集』には「大納言贈従二位石上朝臣宅嗣小山賦一首」およびこれに和する播磨守賀陽豊年の詩ならびに宅嗣の七言「三月三日於西大寺侍宴応招一首高野天皇在祚」が収められている。⁽¹⁴³⁾また『唐大和上東征伝』には鑑真を追悼した彼の詩があり、『東域伝燈目錄』上には彼の著として「浄名経贊一卷」が挙げられている。また『延暦僧録』には「芸亭居士石上朝臣宅嗣、法号梵行」と記され、彼は居士に止って出家はしなかったが、法号を「梵行」と称したことを知り得る。以下数多のことが記されているが、文筆についてはかねて「三蔵讃頌」があり入唐者に託して中国に送ったところ、大唐内道場大徳飛錫らの禅僧が皆感嘆して、日本にも維摩詰が居るのかといふ

かしがったこと、また「飛錫述念仏五更讃」一巻を唐国使に附して送ったところ、人皆欽戴して宅嗣の名を西唐にひるめた旨を伝えている。⁽¹⁴⁴⁾以て彼の学識を知り得よう。

奥継は、息嗣につくり、⁽¹⁴⁵⁾また息継にもつくられているが、天平宝字四年正月北陸道巡察使に任ぜられたのが史料上の初見である。⁽¹⁴⁷⁾このときは河内小掾従六位上であった。同年に越前国校田駅使も勤めているが、間もなく正六位上に二階昇叙したらしく二年後の天平宝字六年正月には正六位上より従五位下に叙され、⁽¹⁴⁹⁾播磨介に任ぜられた。⁽¹⁵⁰⁾宅嗣の授爵に遅れること十一年で、宅嗣はこのときすでに従五位上に昇叙していたが、彼はこの授爵によって宅嗣につぐ族中第二位の有位者となったのである。翌七年四月には少納言となり、⁽¹⁵¹⁾のち西海道節度使に任じたらしく翌々八年十一月には一挙に二階を進めて正五位下に昇叙し、また西海道節度使を罷められている。⁽¹⁵²⁾この二階昇叙は、押勝事件に關連した論功昇叙であろうか、授爵後僅か二年余にすぎないことや先の小納言補任を併せ考えると、彼は宅嗣と違いかなりの年長であったと推想される。翌十二月にも小納言で勅使を勤めたことが知られる。⁽¹⁵³⁾あけて天平神護元年には河内守に任じたらしく、同年閏十月紀伊・河内・和泉行幸の賞として国守の彼は正五位上に昇叙せられた。⁽¹⁵⁴⁾また神護景雲二年十一月には左衛士督に任じて河内守は故の如く、翌三年六月美濃守に任じ、⁽¹⁵⁵⁾宝龜二年閏三月丹波守に転じた。⁽¹⁵⁷⁾同年十一月の大嘗会には石上宅嗣ならびに後述の家成らと神楯杵を立て、同月従四位下に昇叙されたが、時に宅嗣は従三位に昇叙してすでに四年を経ておりこのとき参議から中納言に任じている。ともあれ、彼の昇叙によって石上氏は四位以上の有位者を二人擁することになったのである。宝龜五年三月には大藏卿に任じ、⁽¹⁶⁰⁾同七年三月造東大寺司長官に任じ、⁽¹⁶¹⁾翌八年正月従四位上に昇叙し、⁽¹⁶²⁾同年十月大率大貳に任じた。⁽¹⁶³⁾この後、彼の消息は知られない。おそらくかなりの年配であった彼はこの後さほどの年次を経ず卒去したのではなからうか。

家成は、左大臣贈従一位麻呂の孫で、正六位上東人の子であり、宅嗣とは従父兄弟にあたる。天平宝字五年ごろの

「官人歴名」断簡に下野掾とみえるのが史料上の初見であるが、⁽¹⁶⁵⁾薨年から逆算すると養老五年の生れで、宅嗣より七、八歳の年長である。天平宝字八年十月外従五位下から従五位下に叙され、⁽¹⁶⁶⁾宅嗣・奥継に次いで族中第三位に位置したがまず麻呂の孫たる彼が外階から内位へ進んだことが注意を引く。神護景雲二年六月上総守に任じ、⁽¹⁶⁷⁾同年十一月勅旨少輔に転じ、⁽¹⁶⁸⁾宝亀元年十月には従五位上に昇叙せられた。⁽¹⁶⁹⁾内位に叙せられてから六年でありまずは順調な昇叙といつてよい。二カ月後の翌二年正月春宮員外亮を兼ね、⁽¹⁷⁰⁾同年十一月の大嘗会には石上宅嗣・奥継らと神楯棒を立てた。⁽¹⁷¹⁾また翌宝亀三年九月には南海道覆検使を勤めた。⁽¹⁷²⁾大和国添下郡京北三条班田図に宝亀五年五月「次官従五位上民部(欠)勲六等石上朝臣(欠)」とみえる。宝亀五年には宅嗣は従三位、奥継は従四位下、この時史料上明確な従五位上の該当者は家成のみである。後述の真足継足のうち、継足は授爵後まだ日浅く従五位上への昇叙は考え難く可能性は少ない。真足はこのときすでに授爵後数年を経ており、昇叙の時期を迎え、彼である可能性もあるが、明証がない。従ってこの欠名の石上朝臣は史料上家成の可能性がもっとも高い。もしそうとすれば、家成はこのころ民部大輔(又は小輔)の任にあり、このとき班田使次官を勤めたのであろう。また武功により勲六等を所有していたことが知られる。

宝亀七年正月、正五位下にすすみ、⁽¹⁷³⁾同月東山道検税使に任じた。⁽¹⁷⁴⁾宝亀九年二月宮内大輔に任じ、⁽¹⁷⁵⁾天応元年五月には民部大輔に転じ、⁽¹⁷⁶⁾同年十一月従四位下にすすんだ。⁽¹⁷⁷⁾宝亀末年彼が宮内大輔に任じていたころには従四位上奥継が卒去して彼は族中第二位の座を占めたが、この天応元年六月には宅嗣が薨じて、彼は族中の第一人者となった。⁽¹⁸⁰⁾翌延暦元年閏正月伊予守に任じ、⁽¹⁷⁸⁾同年六月大宰大貳に転じた。⁽¹⁷⁹⁾翌延暦二年五月には造東大寺長官となり、⁽¹⁸⁰⁾翌々延暦三年七月内蔵頭に転じ、⁽¹⁸¹⁾四年九月にはいわゆる藤原種継が暗殺される事件が発生したが、⁽¹⁸²⁾彼はこのとき左衛士権督を兼ね、⁽¹⁸³⁾翌五年二月衛門督に任ぜられた。⁽¹⁸³⁾

延暦六年六月、正倉院御物曝涼使となったが、⁽¹⁸⁴⁾翌七年三月右衛士督に任じ、⁽¹⁸⁵⁾翌々八年三月宮内卿に補任され、⁽¹⁸⁶⁾同年

十二月には皇太后の崩御に際して中宮御葬司の一員となり、翌九年閏三月には皇后の崩御に際し皇后御葬司の一員となった。⁽¹⁸⁸⁾延暦十年正月從四位上に叙せられ、⁽¹⁸⁹⁾十二年六月また正倉院御物曝涼使となったが、このとき宮内卿兼因幡守であった。⁽¹⁹⁰⁾その後幾度か香藥受領使などの雜使を勤めたことが知られるが、さらに三階昇叙せられたらしく延暦二十三年六月散位從三位を以て薨じた。⁽¹⁹¹⁾薨年八十三歳であった。

彼は、僅か五十三歳の壮年で薨じた宅嗣に比して、さらに三十年に及ぶ長寿を保ち、從三位に昇り、長く族中の第一人者として同氏一族に君臨したが、父東人が授爵に至らず死去したためか宅嗣らと異なつて外階コース氏に格付され、遂に議定に登用されることなく、宅嗣の薨後石上氏の議定官補任は長く断絶するに至つたのである。

真足は、神護景雲元年正月正六位上より從五位下に叙せられ、⁽¹⁹²⁾このとき族中第四人目の授爵者として登場した。同年三月内匠助に任じ、⁽¹⁹³⁾同年七月大監物に転じ、⁽¹⁹⁴⁾翌二年二月遠江介に任ぜられている。⁽¹⁹⁵⁾彼に関する知見はこれだけであり、以後の消息は明らかでない。また継足は宝龜三年正月正六位上から從五位下に叙され、⁽¹⁹⁶⁾同年四月主税頭に任ぜられた。⁽¹⁹⁷⁾彼に関する知見もこの二カ条のみであり、以後の消息は不明である。

以上、奈良朝後期の石上氏は、まず宅嗣にせよ家成にせよ、麻呂の孫たちの活躍期に入つたことが指摘できる。次に、後期初頭の淳仁朝には、宅嗣が唯一人の男性授爵者として、しかもようやく從五位下から從五位上に昇叙し得たに止まつたが、間もなく奥継・家成が相次いで授爵し、しだいに層の厚みを加え、押勝伏誅事件以後宅嗣・奥継は昇叙を重ね、宅嗣は議定に列すること十五年正三位大納言に昇り、奥継は從四位上に達した。家成も從五位上からさらに正五位下へと順調に昇叙し、称徳朝末から光仁朝にかけて真足・継足らも授爵して奈良朝の前・中期にくらべれば後期は格段に層の厚さを増したことが指摘できる。また第三に、女性も国守に続き、糸手・等能古と相次いで授爵し、三名も授爵者を擁したことは後期の特色で、一層層の厚さを増したものと見えよう。なお第四には宅嗣が五十三歳で

正三位大納言に叙任されたことは、長寿を保てば当然左右大臣に昇り得、その子孫の議定官補任も望めたかと思われるが、壮年の五十有三を以て薨じたことは、家成の凡庸とあわせて平安朝における議定官補任の道を絶つことになったように思われる。この点、宅嗣の早い薨去は同氏のために惜しまれる。

むすび

上來述べたところを総括すればおよそつぎのようである。

石上氏は、朴井氏とともに大化前代の雄族物部氏のあとで、天武天皇十三年の八色姓賜与のときまでは物部連を称していた。物部氏は、かの有名な蘇我物部両氏の抗争に敗れたのち、一般にはその勢力後退を言われているが、大化以降においてもなお相当の勢力を保ち、政界におけるさまざまな活躍が知られる。とくに即位式・大嘗会等に際し大盾（神楯杵）を立てる行事は物部氏の職掌であったと考えられ、朝廷と密接に結びついていた。壬申の乱においては麻呂（石上氏）は近江側に雄君（朴井氏）は天武側に属して戦ったが、いずれも終始弘文・天武両天皇の側近に侍っていたと考えられる。とくに雄君の功業は、物部氏の伝統的職掌と大化前代における物部氏の名声と活躍を背景に、天武天皇に殊功として意識づけ、大化の功臣藤原一族とほぼ同等の待遇が与えられ、八色姓賜与にあたっても本姓連にかかわらず臣下最高の朝臣姓が賜与されたことが注意される。

麻呂は石上氏の初代で、物部氏の本宗と考えられ、はじめ物部連を称したが、八色姓賜与の時かその後あまり年次を経ない時期に石上朝臣を称した。彼の生涯に大きな関係をもったのは、乱の功臣朴井連雄君の病没であったと思われる。雄君は、長寿を保てば、その功業に照して物部氏を代表する地位に立ったと思われるが、彼の病没によって麻呂が族中の第一人者として重用され、加冠昇叙を加えることになった。

奈良時代前期は麻呂が七十八歳の長寿を保って議定に列すること十六年、そのうち政権の首座にあること十四年、遂には正二位（贈従一位）左大臣に昇って顯要の地位を占めること長期におよんだ。しかし石上氏全体としてはまだ授爵者の数が少なく、麻呂在世中の授爵者は他に豊庭一名が知られるにすぎず、両者の相次ぐ薨卒のあとは一時的であれ族中の授爵者皆無に陥る状況であった。

奈良時代中期は二世たちの活躍期を迎え、麻呂の第三子乙麻呂が議定に列し従三位中納言に任ぜられたが、その任期は短かく前後半世紀にわたる長期間議定に列し得なかった。また乙麻呂のほかには僅かに勝男の正五位上が最高で、従四位にさえ昇る者なく、東人ほか麻呂の子たちをはじめ多くは授爵にすら達せず、前期につづく授爵者層の薄さを指摘できよう。中期の授爵者としては、この乙麻呂・勝男の両者に、両者薨卒後の宅嗣の授爵が知られるのみで、乙麻呂の薨後は、ふたたび一族の男性授爵者皆無に陥る状況であった。

奈良時代後期には乙麻呂の子宅嗣、東人の子家成ら麻呂の孫達の活躍期を迎え、前・中期に比すればまず授爵者層に量的な厚味が加わったことが挙げられる。また宅嗣は遂に議定に列して十六年、正三位大納言となり顯要の地位に昇った。ただ彼が僅か五十三歳比較的年若くして正三位大納言の位階・官職を以て薨去したことは残された家成の資格と凡庸も加わり以後平安時代に入って、石上氏が議定の席を失う原因となったといえよう。

かように奈良時代の石上氏は、多治比・阿部以下の諸氏に比して氏名の明らかな一族の数が少なく授爵者層が薄いこと、前期の麻呂・中期の乙麻呂・後期の宅嗣と子孫相承けて議定に列し顯要に昇ったこと、ところでこの三者はいずれもその出自に加え人物才幹学問の拔群によってその地位に昇り得たこと、他の兄弟は高位はおろか多くは授爵にすら至らなかったこと、従って乙麻呂の前後五十年議定に列する同族のなかったことが指摘できる。おわりに奈良時代における石上氏一覧表を掲げる。

奈良時代における石上氏一覽表

名	授爵前の官職位階	授爵前位年次	授爵直後の補任官職	從五位上叙年次、所要年数	摘要	極位極官	薨卒年次
麻呂					慶雲元・正左二大臣	從四位上	養老元・三78
豐庭		從六上 慶雲元・正		慶雲四・? (四・年?)	從二右大臣	從四位上	養老二・五上
勝男		從六下 養老三・正		神龜三・正	萬葉歌人	從五位上	
乙麻呂		正六上 神龜元・二		天平四・正	麻呂の第三子	從三位上	同勝宝二・九上
東人					麻呂の父子	正六上	
諸男					神龜元・十一上	從六上	
国守	厶位	勝宝元・四		宝字四・五年 (女)			
宅嗣		正六上 勝宝三・正		宝字元・五	經史之愛尚大	從三位上	大納言贈正二53
奥繼	宝字四・正 河内小椽 從六上	正六上 宝字六・正	播磨介	宝字八・十一	大藏卿	從四位上	
家成	宝字五カ 下野椽	外從五下 宝字八・十		宝龜元・十	東人の子	從三位上	散位從三、六83
真足		正六上 景雲元・正	内匠助		大監		
繼足		正六上 宝龜三・正	宝龜三・四頭			(從五下)	
糸手	厶位	厶位 宝字七・正			(女)		
等能古	厶位	厶位 景雲元・十			(女)		
志斐旦	天平神護二・四、聖武天皇皇子詐称事件に石上朝臣志悲旦の名見ゆ						

注

- (1) 『続日本紀』養老元年三月癸卯条
- (2) 『公卿補任』大宝元年(正三位石上朝臣麻呂)条
- (3) 『新撰姓氏録』左京神別、石上朝臣条
- (4) 太田亮氏『姓氏家系辞書』一四一頁
- (5) もちろん『日本書紀』持統四年正月戊寅条に物部麻呂朝臣とみえるから、石上朝臣の称はそれより後のことで、同書にみえる朱鳥元年条などの「石上朝臣」は後称による修辭と考えられなくもないが、『日本書紀』の記述例をみると、必ずしもそのようには思えない。たとえば藤原朝臣大嶋は、天武天皇十二年十二月十三日条以前は中臣連、八色姓制定後の天武天皇十四年九月十八日以降は六カ条にわたり葛原朝臣と記されている。僅かに持統四年正月戊寅条と同五年十一月戊辰条の二カ条のみ中臣大嶋朝臣と記されているが、前者は、持統天皇即位式に当り、後者は大嘗にあたり神祇伯として大嶋が天神寿詞を読んだ記事であり、石上朝臣麻呂が持統天皇即位式にあたり大盾を樹てた時のみ物部麻呂朝臣と記されたのと揆を一にしている。ところで同族の藤原朝臣麻呂の場合をみると、朱鳥元年十二月己巳条はもちろん持統天皇三年二月己酉条も中臣朝臣麻呂と記され、彼が藤原朝臣と記されたのは持統天皇七年六月四日条がはじめである。しかも藤原不比等は、臣麻呂がまだ中臣朝臣と記された持統天皇三年二月己酉条にすでに藤原朝臣史と記されているから、不比等と臣麻呂が中臣か

ら藤原へ改姓した時期は異なっていたと考えるべきであろう。いうまでもなく大島と不比等は早くも朝臣賜姓直後に藤原朝臣氏を称し、臣麻呂は持統朝後半に至ってようやく藤原朝臣に改姓が許されたのであり、『日本書紀』の記述はこのことを反映していると考えべきであろう。

従って、持統四年正月戊寅条の物部麻呂朝臣、中臣大嶋朝臣の記載は即位式に大盾を樹て、天神寿詞を読む古来からの職掌氏族名に則って物部・中臣という本姓で記されたもので、それ以前すでに麻呂が石上氏を大嶋が藤原氏を称していたことをさまたげるものではない

- (6) 『日本書紀』天武天皇元年七月壬子条
- (7) 『続日本紀』養老元年三月癸卯条
- (8) 『日本書紀』天武天皇五年十月甲辰条
- (9) 『日本書紀』天武天皇六年二月癸巳朔条
- (10) 『日本書紀』天武天皇十年十二月癸巳朔条
- (11) 『日本書紀』天武天皇朱鳥元年九月乙丑条
- (12) 『日本書紀』持統天皇三年九月乙丑条
- (13) 『日本書紀』持統天皇四年正月戊寅朔条
- (14) 『日本書紀』持統天皇六年三月戊辰条以下の諸条
- (15) 『万葉集』第一一四四
- (16) 『日本書紀』持統天皇十年十月庚寅条
- (17) 『日本書紀』持統天皇十年十月庚寅条
- (18) 『日本書紀』持統天皇四年正月戊寅朔条、『続日本紀』天武天皇二年十一月己卯条・神龜元年十一月乙卯条など

- (19) 『続日本紀』 大宝元年七月壬辰条
- (20) 『続日本紀』 大宝元年七月壬辰条
- (21) 『日本書紀』 天武天皇五年六月条
- (22) 高島「奈良時代の榎井氏」(『立正史学』42号)
- (23) 『日本書紀』 天武天皇五年六月条
- (24) 『日本書紀』 天武天皇五年六月条
- (25) 『続日本紀』 天武天皇大宝元年七月壬辰条
- (26) 高島「奈良時代における公卿補任の性格」(立正大学『人文科学研究所年報』第7号、昭和43年、12頁)
- (27) 高島「奈良時代の榎井氏」(『立正史学』42号)
- (28) 『日本書紀』 大化二年三月辛巳条
- (29) 『日本書紀』 大化元年九月戊辰条
- (30) 『日本書紀』 齋明天皇四年十一月甲辰条
- (31) 『日本書紀』 天智天皇称制辛酉年八月条
- (32) 『続日本紀』 天武天皇四年十月巳未条、『公卿補任』大宝四年(右大臣從二位石上朝臣麻呂)条
- (33) 『続日本紀』 大宝元年三月甲午条
- (34) 高島「奈良時代における公卿補任の性格」(立正大学『人文科学研究所年報』第7号11頁)
- (35) 『続日本紀』 大宝元年七月壬辰条
- (36) 『続日本紀』 大宝二年八月辛亥条
- (37) 『続日本紀』 大宝三年閏四月辛酉朔条
- (38) 『続日本紀』 慶雲元年正月癸巳条
- (39) 『続日本紀』 慶雲元年正月丁酉条

- (40) 高島「奈良時代における公卿補任の性格」(立正大学『人文科学研究所年報』第7号13頁)
- (41) 『続日本紀』 慶雲二年四月丙寅条
- (42) 『続日本紀』 慶雲二年四月辛未条
- (43) 『続日本紀』 和銅元年正月乙巳条
- (44) 『続日本紀』 和銅元年三月丙午条
- (45) 『続日本紀』 和銅元年七月乙巳条
- (46) 『続日本紀』 和銅三年三月辛酉条
- (47) 『続日本紀』 養老三年三月癸卯条
- (48) 『続日本紀』 養老元年三月癸卯条
- (49) 『続日本紀』 養老元年十一月丙午条
- (50) 『続日本紀』 慶雲元年正月癸巳条
- (51) 『続日本紀』 慶雲四年十月丁卯条
- (52) 『続日本紀』 和銅四年四月壬午条
- (53) 『続日本紀』 和銅四年九月丙子条
- (54) 『続日本紀』 和銅七年十一月庚戌条
- (55) 『続日本紀』 靈龜元年正月癸巳条
- (56) 『続日本紀』 靈龜元年七月丙午条
- (57) 『続日本紀』 養老二年三月乙巳条
- (58) 高島「奈良時代における公卿補任の性格」(立正大学『人文科学研究所年報』第7号16頁)
- (59) 『続日本紀』 養老二年五月癸亥条
- (60) 『続日本紀』 天平三年正月丙子条
- (61) 『続日本紀』 養老三年正月壬寅条・『万葉集』卷八一

四七二

- (62) 『続日本紀』養老三年正月壬寅条
- (63) 『政治要略』所引官曹事類
- (64) 『続日本紀』神龜元年十一月己卯条
- (65) 『続日本紀』神龜三年正月庚子条
- (66) 『万葉集』卷八一—一四七二
- (67) 『続日本紀』天平三年正月丙子条
- (68) 『続日本紀』天平八年正月辛丑条
- (69) 『日本後紀』延暦二十三年六月癸亥条
- (70) 『続日本紀』天平勝宝二年九月丙戌条、『懷風藻』石上朝臣乙麻呂の伝

- (71) 『続日本紀』天応元年六月辛亥条
- (72) 『続日本紀』神龜元年二月壬子条
- (73) 『続日本紀』神龜元年十一月己卯条
- (74) 『続日本紀』天平四年正月甲子条
- (75) 『続日本紀』天平四年九月乙巳条
- (76) 『続日本紀』天平八年正月辛丑条
- (77) 『続日本紀』天平九年九月己亥条
- (78) 『続日本紀』天平十年正月壬午条
- (79) 『続日本紀』天平十年正月乙未条
- (80) 高島「奈良時代における公卿補任の性格」(立正大学『人文科学研究所年報』第7号18頁)
- (81) 次に述べる彼が土佐に配流された直後の天平十一年四月参議に補任された巨勢朝臣奈呂麻呂・大伴宿祢牛養・県

犬養宿祢石次は、いずれも從四位下である。

- (82) 『続日本紀』天平十一年三月庚申条
- (83) 『続日本紀』天平十二年六月庚午条
- (84) 『続日本紀』天平十五年五月癸卯条
- (85) 『続日本紀』天平十六年九月甲戌条
- (86) 『続日本紀』天平十八年三月己未条
- (87) 『続日本紀』天平十八年四月己酉条
- (88) 『続日本紀』天平十八年四月癸卯条
- (89) 『続日本紀』天平十八年九月己巳条
- (90) 『続日本紀』天平二十年二月己未条
- (91) 『続日本紀』天平二十年四月辛酉条
- (92) 『続日本紀』天平二十一年四月甲午朔条
- (93) 『続日本紀』天平二十一年七月甲午条
- (94) 『続日本紀』天平勝宝二年九月丙戌朔条
- (95) 『公卿補任』天平廿年・天平廿一年(石上朝臣乙麻呂)条
- (96) 『万葉集』卷三—三六八
- (97) 『万葉集』卷六一—一九—一〇二三
- (98) 『万葉集』卷三—三六八
- (99) 竹内理三氏編『寧楽遺文』所収(下巻、九〇九頁)、ほか
- (100) 『続日本紀』神龜元年十一月己卯条
- (101) 『続日本紀』天平勝宝元年四月甲午朔条
- (102) 『続日本紀』天平宝字四年五月壬辰条

- (103) 『続日本紀』天平勝宝三年正月己酉条、同書天応元年六月辛亥条薨伝、また『公卿補任』天平神護二年(正四位下石上朝臣宅嗣)条
- (104) 『続日本紀』天平宝字七年正月壬子条
- (105) 『続日本紀』神護景雲元年十月甲午条
- (106) 『続日本紀』天平神護二年四月甲寅条
- (107) 『万葉集』卷第十九―目次ほか
- (108) 『万葉集』卷十九―四二八二・四二八三・四二八四
- (109) 『続日本紀』天平宝字元年五月丁卯条
- (110) 『続日本紀』天平宝字元年六月壬辰条
- (111) 『続日本紀』天平宝字八年九月乙巳条
- (112) 『続日本紀』天平宝字八年十月丙寅条
- (113) 『続日本紀』天平宝字三年五月壬午条
- (114) 『続日本紀』天平宝字五年正月壬寅条
- (115) 『続日本紀』天平宝字五年十月癸酉条
- (116) 『続日本紀』天平宝字六年三月庚辰朔条
- (117) 『続日本紀』天平宝字七年正月壬子条
- (118) 『続日本紀』天平宝字八年正月乙未条
- (119) 『続日本紀』天平神護元年正月己亥条
- (120) 『続日本紀』天平神護元年二月己巳条
- (121) 『続日本紀』天平神護二年正月甲子条
- (122) 『続日本紀』天平神護二年十月丁未条
- (123) 『続日本紀』神護景雲二年正月乙卯条
- (124) 『続日本紀』神護景雲二年十月甲子条
- (125) 『大日本古文書』五―七〇五・七〇七
- (126) 『続日本紀』天応元年四月癸卯条
- (127) 『続日本紀』宝龜元年八月癸巳条
- (128) 『続日本紀』宝龜元年九月乙亥条
- (129) 『続日本紀』宝龜二年三月庚午条
- (130) 『続日本紀』宝龜二年十一月癸卯条
- (131) 『続日本紀』宝龜二年十一月乙巳条
- (132) 『続日本紀』宝龜四年十月丙辰条
- (133) 『続日本紀』宝龜六年十二月甲辰条
- (134) 『続日本紀』宝龜八年九月丙寅条
- (135) 『続日本紀』宝龜八年十月辛卯条
- (136) 『続日本紀』天応元年六月辛亥条
- (137) 『続日本紀』宝龜十年五月丁巳条
- (138) 『続日本紀』宝龜十年十一月甲申条
- (139) 『続日本紀』宝龜十一年二月丙申朔条
- (140) 『続日本紀』天応元年六月辛亥条
- (141) 『公卿補任』天平神護二年(石上朝臣宅嗣)条、宝龜二年(石上宅嗣)条
- (142) 『日本後記』弘仁六年六月丙寅条、賀陽朝臣豊年卒伝
- (143) 『経国集』一―十
- (144) 『日本高僧伝要文抄』三
- (145) 『続日本紀』天平宝字八年十一月乙巳条、同天平神護元年閏十月辛卯条
- (146) 『続日本紀』神護景雲二年十一月癸未条

- (147) 『続日本紀』天平宝字四年正月癸未条
- (148) 「越前国足羽郡司解」(『大日本古文書』五一五四三)
- (149) 『続日本紀』天平宝字六年正月癸未条
- (150) 『続日本紀』天平宝字六年正月戊子条
- (151) 『続日本紀』天平宝字七年四月丁亥条
- (152) 『続日本紀』天平宝字八年十一月乙巳条
- (153) 「従良奴婢注文」(『大日本古文書』廿五—二)
- (154) 『続日本紀』天平神護元年閏十月辛卯条
- (155) 『続日本紀』神護景雲二年十一月癸未条
- (156) 『続日本紀』神護景雲三年六月乙巳条
- (157) 『続日本紀』宝龜二年閏三月戊子朔条
- (158) 『続日本紀』宝龜二年十一月癸卯条
- (159) 『続日本紀』宝龜二年十一月丁未条
- (160) 『続日本紀』宝龜五年三月甲辰条
- (161) 『続日本紀』宝龜七年三月癸巳条
- (162) 『続日本紀』宝龜八年正月庚申条
- (163) 『続日本紀』宝龜八年十月辛卯条
- (164) 『日本後紀』延暦二十三年六月癸亥条石上家成薨伝
- (165) 「官人歴名」(『大日本古文書』十五—一三二)
- (166) 『続日本紀』天平宝字八年正月庚午条
- (167) 『続日本紀』神護景雲二年六月戊戌条
- (168) 『続日本紀』神護景雲二年十一月癸未条
- (169) 『続日本紀』宝龜元年十月己丑朔条
- (170) 『続日本紀』宝龜二年正月辛巳条

- (171) 『続日本紀』宝龜二年十一月癸卯条
- (172) 『続日本紀』宝龜三年九月癸卯条
- (173) 『続日本紀』宝龜七年正月丙申条
- (174) 『続日本紀』宝龜七年正月戊甲条
- (175) 『続日本紀』宝龜九年二月庚子条
- (176) 『続日本紀』天応元年五月癸未条
- (177) 『続日本紀』天応元年十一月己巳条
- (178) 『続日本紀』延暦元年閏正月庚子条
- (179) 『続日本紀』延暦元年六月辛未条
- (180) 『続日本紀』延暦二年五月辛卯条
- (181) 『続日本紀』延暦三年七月壬午条
- (182) 『続日本紀』延暦四年九月己未条
- (183) 『続日本紀』延暦五年二月丁丑条
- (184) 「延暦六年六月廿六日珍財帳卷」(『平安遺文』八一—三九〇)
- (185) 『続日本紀』延暦七年三月己巳条
- (186) 『続日本紀』延暦八年三月戊午条
- (187) 『続日本紀』延暦八年十二月丙申条
- (188) 『続日本紀』延暦九年閏三月丁丑条
- (189) 『続日本紀』延暦十年正月戊辰条
- (190) 『曝涼目録』(『平安遺文』八一—三二〇〇)
- (191) 『日本後紀』延暦二十三年六月癸亥条
- (192) 『続日本紀』神護景雲元年正月己巳条
- (193) 『続日本紀』神護景雲元年三月己巳条

- (194) 『続日本紀』 神護景雲元年七月丁巳条
- (195) 『続日本紀』 神護景雲二年二月癸巳条
- (196) 『続日本紀』 宝龟三年正月甲申条
- (197) 『続日本紀』 宝龟三年四月庚午条